

【書評】

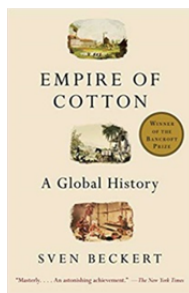
## 「南北問題」の歴史を解読する

——グローバル・ヒストリーと「南」の軌跡——

Sven Beckert, *Empire of Cotton: A Global History*, Alfred A. Knopf, 2014, 615pp.

Thomas Deltombe, Manuel Domergue, Jacob Tatsitsa, *Kamerun!: Une guerre cachée aux origines de la Françafrique, 1948-1971*, La Découverte, 2011, 741pp.

勝 俣 誠



### はじめに

#### 1. 「南北問題」の30年

わたくしは明治学院大学の国際学部で20年近く「南北問題」という名称の科目を学部生に講義してきた。学生たちには「南北問題」にまつわるニュースや時事解説などのコピーも配布してきた。参考文献リストにもいわゆる経済開発論の古典書以外に、ジャーナリストや「南」で活動する市民団体(NGO)のスタッフなどのレポート風の一般書も付け加えてきた。そして年月を経て、当時の毎回の講義準備用メモノートや配布資料をざっと目を通してみると、一つ一つのコマが次から次へと紆余曲折しながらもひとつの映画作品となっていくように見え、一つの物語になったような感にとらわれる。

そんな時、わたくしはフィリピン出身のキドラット・タヒミック監督の映画「500年の航海」を見る機会があった<sup>(1)</sup>。高校の世界史教科書にも出てくるマゼラン艦隊の世界一周に参加した、ルソン島生まれの島民のライフ・ストーリーから、この国の500年を再構成した作品である。主人公の島民はマラッカの中国商人に身柄を売られ、マゼランの世話をする奴隷となり、ヨーロッパにも行く。マゼラン自身は現在のフィリピンのセブ島近くの島で島民によって殺害されるが、この島の青年は世界一周を続ける艦隊に同行し、最後には無事故郷の島に戻る。見終わって、この長い時間の取り方といい、登場人物の多国籍性といい、今日、一つの歴史学のアプローチとしてよく出てくるグローバル・ヒストリー風のアジア版だと思った。

さて、こうしたわたくしの「南北問題」関係の資料整理作業や関心からその方法論ないしアプ

ローチとして今回論評を試みるのは、それぞれ邦訳タイトルで示すと、『綿の帝国』と『カメルン！—フランサフリックの諸起源となった隠された戦争 1948年-1971年』である。

## 2. なぜこの2冊か？

この2冊をあえて今回選択した理由は、主として以下の3点である。

まず第1は、アフリカの地域研究者としてこの地域の政治経済社会をネーション・ステーツを単位として分析してしまうと、その網目から漏れてしまうより多様なつながりないしネットワークのもつダイナミズムが見えにくくなるという点である。その結果、ともすると一国内で完結してしまうアプローチでいいのかという懸念が、評者にとって近頃ますます強まってきているからである。確かに一国単位だと、研究資料収集や政策提言など集中しやすく、高い専門性を形にしやすい効率上のメリットがあるかもしれない。しかし、社会現象の大きな流れ、またその転換点などを探るには従来の一国単位分析では不十分で、より大きな分析・考察がますます不可欠となっている。

第2は、いずれも「南」ないし低開発国・開発途上国地域を対象としていることである。第一次冷戦が終わる1980年代末から1990年代初めにかけて、「南北問題」は「東西問題」の終焉とともにグローバル化する経済の中で溶解してしまうという論評が目立ちだした。アジアやアフリカなどの近代史において、植民地支配を経験した地域の経済的遅れは、経済の自由化と複数政党制導入という政治の自由化のセットにより解消できる、バラ色のシナリオが力を持った時代であった。しかしながら、ここ30年を振りかえって見ただけでも今日の「南」は、BRICSなどと呼ばれる「新興諸国」が浮上してきたものの、「南」の諸社会の貧困や格差や暴力はまだらがあるとしても消えていない。それどころか地域によっては内戦状態に陥たり、ヨーロッパへの大量移民・難民現象となって顕在化している。

第3は、これら2つの作品はいずれも個別のモ

ノ（綿）及びヒト（ナショナリスト）に焦点を合わせ、これらが織りなす国境を越えたネットワークを記述して「南」の近・現代史をグローバルかつ身近に解き明かそうとしているからである。確かに、この2冊の本の学問領域も狙いも同じでない。『綿の帝国』は経済史で、その再構築を狙いとしている。それに対して、『カメルン！』は現代社会運動史ないし国際関係史として位置づけられ、狙いは、冷戦下における植民地、独立期の暴力の性格を解明し、告発することである。この点からすると南北関係の歴史をモノとヒトを切り口として個々の学問領域の境を越えて再概念化するそれぞれの分野の研究者からすれば、やや突飛な越境行為に映るかもしれない。しかし綿というモノが織りなす近現代史とナショナリストというヒトが変えようとする現代史を同じ地平で読んでみようとする営みは、南北関係をなぜ「問題」化するのかを考える機会を与えてくれる。

### 1. 『綿の帝国』

#### 1-1 本書の狙いと構成

まず前者の筆者であるスヴェン・ベッカートによる狙いと構成を簡単に紹介しておこう。

本書は18章、600ページ強にわたる物理的にも重たい大著である。テーマはタイトルが示す如く、綿<sup>(2)</sup>という商品に焦点を合わせ、その商品の生産・流通・加工・消費を通じて形成される権力の様態を叙述することである。サブタイトルが「一つのグローバル・ヒストリー」となっているのは、時代と地域とともに絶えざる変遷を遂げる、この商品を通じて形成される多様なネットワークが、一つのグローバルな歴史となっているからである。

ではこの大著はどのような目的意識で手掛けられたのか、序章での記述を引用して簡単にまとめておこう。

筆者はまず、本書を「ヨーロッパの支配型の綿帝国の興亡のストーリー」とする。綿を中心に展開するこのストーリーはまたグローバル資本主義の形成と再編成のストーリーでもあり、それとともに展開する近代世界のストーリーでもある（XI

ページ)」。

したがって、読者は、本書の中心課題が綿から見えるヨーロッパが形成した越境型資本主義の形成であり、近代世界なるものを生んだ未曾有の権力と富の蓄積プロセスをあきらかにすることにあると理解する。

では次に、なぜ数ある国際商品ないし越境型商品の中で、あえて綿がモノの対象として選ばれたのであろうか？

筆者によれば、綿は「紀元 1000 年から 1900 年までのおよそ 900 年間は世界で最も重要な製造業であった (XII ページ)」。

そしてヨーロッパの産業革命においては綿産業こそが決定的役割を果たし、近代世界を画したとする。

では各章を簡単にまとめて全体の展開を「南北問題」の視点から興味深いと思われた点に注目して簡単に紹介しておこう。

- 第 1 章：グローバル商品の興隆
- 第 2 章：戦争資本主義を建設する
- 第 3 章：戦争資本主義の賃金
- 第 4 章：労働を捕獲して、大地を征服する
- 第 5 章：奴隷制による支配
- 第 6 章：戦争資本主義は飛び立つ
- 第 7 章：産業労働者を動員する
- 第 8 章：グローバル綿をつくる
- 第 9 章：一つの戦争が世界中に影響を与える
- 第 10 章：グローバル復興
- 第 11 章：数々の破壊
- 第 12 章：新・綿帝国
- 第 13 章：グローバル・サウスの復帰
- 第 14 章：織物と紡織：エピローグ

第 1 章「グローバル商品の興隆」では 1500 年前の南米アステカの綿花栽培の記述から、ヨーロッパを経て、オスマン帝国の最盛期 16 世紀までの綿業が手短かに紹介される。実際、オスマン帝国は綿と綿製品の流れを支配する強力な国家として、それまで繁栄していたベネチア発のサプライチェーンを衰退させる。そして 16 世紀には、英国の商人がサルタンから勅許を得て、このチェーンの特権

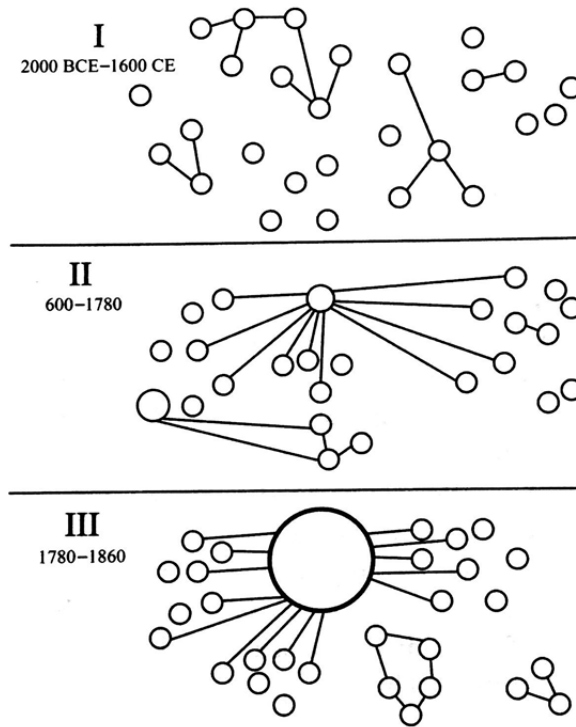
的サプライヤーになる。ここで綿業の新たなる中心地は地中海から大西洋に移る。そしてヨーロッパ人たちは「国家権力の展開こそこれらの新しい貿易圏で成功を収められるという確信を持つようになる。(28 ページ)」。

第 2 章「戦争資本主義を建設する」ではヨーロッパの諸国家の支援の下でのアジア、南米、アフリカへの経済進出が叙述される。ただヨーロッパ国家は遠隔地での支配力は弱く、英国東インド会社のようにしばしば特許会社の形をとった。そこでは「所有権を確立させるのではなく、労働と土地の収奪がこの時代の特徴となり、資本主義の非リベラル的起源を証拠付ける (37 ページ)」と綿帝国の暴力の誕生が読者に予告される。そして 18 世紀末になると、英国こそが「世界の綿ネットワークのハブ (55 ページ)」となるとする。

第 3 章「戦争資本主義の賃金」では冒頭で英国ランカスターでのミュール紡織機の画像が挿入されているように 1780 年から 1815 年にかけての英国の産業革命を決定的にした綿の栽培、加工、消費のネットワークがどれほど暴力的で、それゆえ安い賃金で実現できたのかの記述が中心となる。筆者はこの 3 者の関係を、紀元前 2000 年から 1860 年までのメガ期間を対象として以下の図 1 のように特徴づけている。フェーズ I は栽培、加工、消費が地球上にバラバラに散在し、互いに接続しあうことがほとんどない。フェーズ II はヨーロッパを中心にネットワークが形成されるが、全体としてまだ分散している局面である。フェーズ III では本章で扱われる産業革命後のヨーロッパ中心の生産ネットワークが一極化に向かう、とする。

かくして、いかに拡大する英国の綿業が膨大な量の綿花を世界から確保するかという至上命令に対して、1770 年から 1860 年にかけて、筆者によればこの時期は「恐るべき 90 年間 (81 ページ)」で、産業資本主義は「戦争資本主義にとって代わるというよりこれを一層強化することになった (81 ページ)」とする。そこでは英国の家内制工業の非効率的な生産から子供や女性が低賃金で働

図1 世界における綿栽培者、加工業者、消費者間の空間的配列の変遷（紀元前2000年-1860年）



出典： *Empire of Cotton*, 58 ページ

く都市労働層の形成が言及される。

第4章「労働を捕獲して、大地を征服する」では18世紀末の英国の綿業発達を支えた原料たる綿の海外調達の変遷が記述される。18世紀までは加工用綿花のほとんどはアジア、アフリカ、南米の小農によって栽培され、消費されていたが、急成長する英国の綿業は「その（原料に、評者注）飢えたる工場のニーズを満たすために十分な原綿が輸入されるかどうか先行き不安が生じる（84ページ）」という事態に直面する。そこで新たに登場するのが従来、大西洋奴隷貿易で栄えていた西インド諸島の砂糖プランテーションでの綿花栽培である。それは「暴力によって土地と労働を獲得する戦争資本主義のカタチを取るが、ハイチにおける奴隷の蜂起のように資本側に多大なコストを伴うことになり、このビジネスモデルは経済的魅力を

失っていく。そこで登場するのがより効率的な奴隷制で豊富な原料＝原綿の供給力を有する米国南部で、このビジネスは以降未曾有の規模で成長していく。

第5章「奴隷制による支配」では、英国本国での綿業の急成長に伴う大量の原綿供給先となる米国の奴隷制下の綿花栽培の拡大プロセスが、従来の供給先に及ぼす影響とともに記述される。この土地の収奪と奴隷制という強制労働に立った戦争資本主義により、18世紀末には微々たるシェアしか占めていなかった米国は、1830年ごろにはインドやブラジルなどを圧倒し、その4割近くを占めるに至る。筆者によれば、綿帝国はその最強の価格競争力で世界各地のライバル業者を周辺化し、次には「グローバル経済の侵入に対して世界の農村部（world's country side）でのより多くの土

地と労働を脆弱性にさらすことになる（134-135ページ）」と予告する。

第6章「戦争資本主義は飛び立つ」では機械化された綿業が英国で見られたような工業化の担い手として世界に拡散していく記述が中心となっている。ドイツ、フランス、ベルギー、ロシア、メキシコなどでの綿製品業の興隆事例が紹介される。そこでは、工業化の地域的格差を説明する要因として自国内での産業を保護して、国内産業を育成し、賃労働の動員を容易にする国家の役割が注目される。そして、筆者をして「近代国家の地図はほぼ完全に綿業工業化を生んだ地域(regions)の地図と重なり合っている（156ページ）」と言わしめる。また筆者によれば、この現象は国家による綿業工業化育成能力のみでは説明できず、「諸国家内の力の分布（171ページ）」にも左右され、ブラジルのような奴隷労働に依存した国家は「明らかに後進性が目立ち、自国内工業化勢力の持つ政治経済的権益を支援する力が弱かった（171ページ）」。

第7章「産業労働者を動員する」では前章の産業資本主義を可能にした国家による制度面でのイノベーションとしての新しい労働の動員形態が言及される。そこでは綿帝国を支える強力な国家の内側において労働者の組織化・組合化が進み、ストライキなどによる団体交渉力を高め、自分たちの労働条件や生活向上を実現した過程が強調される。筆者によれば「今日の経済学の教科書が理想化している労働市場なるものは実際にはそれほど生じることはなかった（198ページ）」という結論になる。

第8章「グローバル綿をつくる」では世界初の近代的製造業たる綿帝国のグローバルな側面に焦点が合わされる。筆者によれば、このグローバル化を推進する勢力(globalizers)は、ブランテーションのオーナーでもなければ、「製造業者でもなく、綿花栽培者、加工業者、消費者をつなぐネットワークを専業とするトレーダー（226ページ）」である。

そしてこれらのグローバルなヴィジョンを身に着けた商人(merchants)は、やがて産業資本家こそが国家と連携して「綿生産と消費のために必要な土地と労働をさらに見つけていくためにグローバル農村部(global countryside)へと侵入する能力を身に着けていくことになる（241ページ）」と説く。

第9章「一つの戦争が世界中に影響を与える」では米国の南北戦争(1861-1865)におけるグローバル綿帝国についての記述が中心となる。そして、「南北戦争中、エジプト、ブラジル、インド、またアメリカ合衆国南部のユニオン軍地域での非奴隷製綿への急激な方向転換は、結局のところ、綿は残るが奴隷がいなくなった世界は一体どんなものかというグローバルな実験を意味することになった（268ページ）」と南北戦争終了後の新たなグローバル綿市場の与件を提示する。

第10章「グローバル復興」では南北戦争後から1920年ごろまでに展開する綿資本主義のグローバルな展開の記述が中心となる。「奴隷が綿帝国を革命化したように、その解放は綿資本主義家たちに自らの革命を迫ることになり、彼らは世界中の綿花栽培労働を組織化する新たな方策を血眼で探し出した（275ページ）」のである。すなわちそれは綿帝国がグローバル化した後、土地、労働、資本及び国家のパワーの革新的組み合わせを求める（275ページ）ことである。地理的には、米国南部(ルイジアナ、オクラホマなど)、メキシコ、エジプト、インド、朝鮮、西アフリカなどでの綿花生産のための労働力活用の可能性が探られることになる。そのためには20世紀初めには商社、農園主、メーカー、官僚が集まる国際綿会議さえヨーロッパの主要都市において定期的開催されるようになった。筆者によればこうした会合は「中心部経済の周辺部からの安価で大量の農産物商品を求めるニーズと、新しい労働形態をどのようにして両立させるかという、資本家と官僚の間のグローバル言説の重要な部分(part and parcel)（310ページ）」となったのである。

第11章「数々の破壊」では南北戦争の終わった1865年以降の奴隷制なき産業資本主義の急速な発達についての章である。インド、米国南部、ブラジル、さらには西アフリカ、中央アジアへと綿花栽培農民は新たな労働システムへと編入されていく。筆者によれば、「総論的に言って、労働の新たなシステムの登場と綿花のとてつもない供給増加は製造業の諸中心部と農村部との間に新たな関係を創出するという産業資本主義の最も革命的なプロジェクトを示すことになった(313ページ)」のである。そのプロセスは世界中の綿花栽培者に過酷な労働を強いるもので、時には軍事侵攻による平定化さえ伴う暴力も行使されることもあったと叙述される。そしてこれらの悲惨な労働条件に抗う農民の蜂起も激化する。

第12章「新・綿帝国」では20世紀初頭の綿業に支えられた新興産業資本国の日本が事例として登場し、この国がいかに朝鮮などでの綿花調達のために試行錯誤したかという記述で始まる。さらには当時ドイツの保護領であった西アフリカのトーゴや中央アジア、ベルギー領コンゴなどでの後進地域の事例が紹介される。かくして生まれる「産業資本主義は地球規模の不平等を劇的に尖鋭化させ、20世紀の大半を通してこれらを強固なものとした(377ページ)」とする。

第13章「グローバル・サウスの復帰」では1世紀にわたり綿帝国として君臨してきた欧米が生んだグローバル資本主義が、この2大中枢を終わりに導き、綿業の中心は「グローバル・サウス」へと移行する新たな経済地理が提示される。

綿業先進地域の欧米では綿業労働者は国民国家の中で労働条件改善のための交渉力を強める一方で、欧米発の産業資本主義モデルは「グローバル・サウス」へと移転する事例が紹介される。具体的には、中国、ブラジル、日本、エジプト、インドなどの各国のナショナリズムに支えられた綿加工業の発達が記述される。筆者によれば、「グローバル・サウス」での綿業の復活ないし復帰は、労働コストを引き上げた労働者の集団的行動を伴う産

業資本主義の中心部と、自分たちの国にも綿業を育てたいとするその周辺部双方の社会的パワーの均衡の変化から生じたことになる。すなわち、「要求を強める『北』の労働者と政治的に巧みな『南』の資本家が綿帝国の姿を変容させ、今日かくも見慣れた新たな新グローバル分業の原型が形成された(383ページ)」とする。

第14章「織物と紡織：エピローグ」ではいずれも2013年のウォルマートの特別シャツ売り場とバングラデッシュの縫製工場ビル崩壊で負傷した女子労働者の画像2点が冒頭に掲載される。筆者によれば、「暴力の様々な形態の中でも奴隷制、植民地主義そして強制労働は、資本主義の歴史においてたまたま生じた逸脱(aberrations)ではなくて、それどころかその核心をなしていた(441ページ)」としている。

## 1-2 「南北問題」の歴史的ルーツを探る

以上、経済史の研究成果の評価というより、「南北問題」の歴史性を探るという関心から単純化を覚悟で足早に各章の展開をまとめてみた。

この読み方からして、興味深く感じたのは以下の4点である。

まずは本書を貫く明快な方法論についてである。

第一に指摘しなければならないのは、本書では頻繁に「グローバル・サウス」という表現が出てくる点である。確かに本書では米国内の南部諸州も「グローバル・サウス」のカテゴリーに入れているが、冒頭に述べたようにこの表現の一般的了解では第二次大戦後のヨーロッパ列強によるアジア・アフリカでの植民地支配の終焉プロセスから生まれた「南北問題」の「南」に相当する。「南北問題」とは国際政治経済学的アプローチからは国際間の富と権力の不均等な分布とその展開を地理的に表現したものである。ここでは、この学問分野を近・現代史において富と権力を築いてきた欧米や、さらには日本を中心とする先進国「北」と、かつて植民地支配を受けた後進国「南」の間に生じる貧困、格差、暴力を分析・考察する学問分野

と定義しておこう。これからする「グローバル・サウス」を想定して展開する本書は、いわば現代世界で観察される「南北問題」という社会現象をより長い時間軸で追った「南北関係史」としても位置づけられるとわたくしは思った。

確かに南北問題とはそれを問題化し、是正を求める「南」という政治的存在ないしその地域に住む人々の「南」という自己認識なくして成立しえない。この現代的意味からは「南」とは「東西問題」と交差しながら植民地支配から脱却し自己決定権を取り戻そうとする冷戦下の中で生まれた現代世界の社会現象である。それ以前は「南」という範疇ないし分析・考察単位ではアジアやアフリカ地域の諸問題は取り組まれてこなかった。名称としては、ある植民地当局による特定地域の「現地人問題」やキリスト教ミッションなどによる「人道問題」であった。このいわば「ブレ南北問題」期にあえて「グローバル・サウス」という用語を導入したグローバル資本主義史の記述手法はわたくしにとってユニークに映り、かつこれによって「南北問題」の歴史的ルーツ（発生）、そのダイナミズム（展開）、その思わぬ変容（展望）の考察を可能にする新たな切り口をわたくしに示唆してくれた。

実際、「南北問題」の半世紀を振りかえって、この問題の分析と考察が、ともするといつの間にか富裕国「北」による貧困国「南」に対する援助論、ないし国際協力論、さらには国際開発論といった、個々の実務的政策問題に矮小化されてしまうことに、わたくしは研究課題としてのこの問題の今日的アプローチの拡散に、やや危機感を抱いてきた。より大きな時間のスパンとより広い地理的考察で、格差と暴力を生むことなく生成できないこの南と北が織りなす資本主義の軌跡と輪郭を、読者に豊富な資料で提示してくれた本書の功績は大きい。

第2に興味深く思えた点はある。「綿」というモノからこのグローバル経済史を叙述しようとしたことである。日本ではここ半世紀、「南」で主として「北」向けに生産・輸出されてきた「バナナ」や「エビ」や「カツオ」やさらには「コーヒー」

や「カカオ豆」などの国際商品にまつわる越境型記述として、数々の「北」の消費者・読者に「南」の生産者との関係を再考させる内容豊かな作品を生んできた。しかし綿というモノは被覆物（毛皮、毛織物、絹など）のような人間の皮膚を保護するいわば生存に不可欠な「生命材」として、資本主義社会以前の人類社会でも栽培・加工されてきた。この点で、綿の持つその使用価値としての性格は上記の熱帯産の「北」向け嗜好品と異なる。例えば、木材、石炭、石油といったやはり人間の生存にとって不可欠なエネルギー材の歴史研究に本書は分類できるのかと筆者は自問した。実際、この綿の栽培、生産、分配・流通がその汎用性ゆえに地理的に世界に分布している考察素材を選択した結果、例えばすでに紹介した図1のように、前資本主義世界をも射程に入れた世界的展開の特質を、より明快に記述することが可能になったのである。

第3に興味深く読んだ理由は、本書には従来の世界資本主義論ないし世界システム論と重なりながらも、生産力発展史観による資本の内的矛盾を克服するとされる社会主義・共産主義の展望についての問題提起が不在であることである<sup>(3)</sup>。筆者は最終章で資本主義的革命に言及することはあっても、それは「まさに世界の織機が休むこともなく新しい素材を製造しているように、つまるところ我々の世界を絶えず再・創出し続けているのだ（443ページ）」として、これから一体この資本主義はどうなるかという予言的考察には極めて自制的である。こうしたスタンスは経済史研究からすればごく当たり前であるかもしれないが、国際政治経済学の視点、とりわけ南北格差の是正を問題として設定するいわばグローバル正義的スタンスからすると、「どんな世界にこれから人類は住みたいのか」という資本主義の未来に対する規範的問いは、わたくしたちの課題としては放棄できないと感じた。

本書で改めて気づかせたくれた最後の点は、綿帝国の盛衰が、奴隷制や植民地支配などを通じた土地や労働の暴力的確保の産軍一体のプロセスでもあった（戦争資本主義）ことを正面から提示し

たことである。グローバル経済史では、わたくしが「南北問題」の視点から注目した限りでは、近代世界におけるアジアの生産活動や交易による経済成長に注目する研究は、折から世界経済において中国やインド経済の重要性が増してきている現状もおそらく作用し、一層活発化しているようにみえるが、本書でしっかりと言及されているようなその拡大プロセスの歴史に見いだされる暴力性やその受容に抗したり、蜂起したり、団結して交渉したりしてきた労働側の主体的社会運動への目配りは多くないように思える。この意味で本書の視点は、「南北問題」の根柢を支えるより公正な世界政治経済の秩序を探るという規範性を備えた研究領域との親和性を感じた。

## 2. アフリカ現代史を読み直す『カメルン！—フランサフリックの諸起源となった隠された戦争 1948年-1971年』

### 2-1 本書の目的と構成

本書はギニア湾に面するカメルン共和国の現代史を扱った700ページを超える大著である。副題に「フランサフリックの諸起源となった隠された戦争 1948年-1971年」とある。「フランサフリック」とは、アフリカ地域でのフランスの植民地が、独立後もフランスとの政治・軍事・経済・文化面での実質的従属関係を維持する、見えにくい、ないし非公式な支配体制を指す造語で、このフランス・アフリカ諸国間の不透明かつ暴力的関係を批判する際に使われてきたが、冷戦後には政治家が公式の場で使用するなどこの関係を特徴付ける用語として定着するようになった。1948年とは第二次大戦が終わった直後国際連合により英仏の信託統治国となったカメルンにおいて、他のフランス領アフリカ植民地での自治要求やインドや中国などのアジアの民族自決運動に触発されて、カメルン人の人権回復のための本格的運動体となるカメルン人民同盟(Union des populations du Cameroun, UPC)が、この国の南部で形成された年であるからである。また1971年とは、やがてカメルンの統一と独立を要求する全国組織へと成長するUPCがフランス当局によって弾圧され、

1960年のフランスの庇護の下での「独立」後も、カメルン国内で反政府活動を率いたUPCの最後のリーダー、エルネスト・ウアンディエ(Ernest Ouandier)が、カメルン政府当局によって公開処刑された年であるからである。また本稿においては「カメルン、フランス語でCameroun、英語でCameroon」と一般的に表記される以外に、「カメルンKamerun」という2つの表記が使用される。後者があえて表記される時は、ナショナリスト運動たるUPC運動では植民地時代の命名を拒否するためCをKにして、フランス語のrounないし英語のroonをrunにした経緯を尊重するためである。

まず4部33章からなる本書の構成を概略しておこう。

序章：忘れられた戦争の調査

第1部 “カメルン”，フランス帝国内の傷口 (1945-1954)

1. デゥアラ-ブラザビル-デゥアラ：植民地の動揺 (1940-1945)
2. 「人間的植民地化」幻想
3. 「フランス連合」かブラザビル幻想の終焉か (1946-1947)
4. UPCの誕生 (1947-1948)
5. 「ユーラシア型」相互依存関係の罍
6. ようこそUPC (1948-1954)
7. UPCにとって代わる勢力の不在

第2部 UPCに対する攻撃 (1955-1958)

8. ロラン・プレは反乱対策を打ち出す (1954-1955)
9. UPCの禁止 (1955年5月)
10. 「白人たちの国」で
11. こめかみに銃弾 (1956-1957)
12. 抱き合うカメルン (1957)
13. 「バミレケのクニ」での弾圧 (1957-1958)
14. ZOPAC (zone de pacification, 平定対象圏, 評者注) の起源：サナガ・マリチーム地方での軍事ドクトリンの輸入
15. ZOPAC (I)：集団化して思想を刷り込む
16. ZOPAC (II)：追いつめて、排除する



### 第3部 血にまみれた独立 (1959-1960)

17. アヒジヨとドゴール：独立の養父たち
18. 外交のゲリラ戦 (1958-1959)
19. 「勝利か死か」：カメルン民族解放軍の創設
20. 偽装された弾圧
21. 1960年1月の偽の「独立」
22. 1960年1月：フランス軍は「再侵略」開始
23. 「首までつかる」戦争
24. 「アフリカ流」抑圧
25. フランサリックの毒

### 第4部 フランサアフリカの独裁時代 (1961-1971)

26. 居座る独裁者 (1961-1963)
27. 反乱対処型新植民地主義 (1961-1964)
28. 「カメルン革命」の栄光と悲惨 (1961-1963)
29. 魂の村度と「反テロリズム征伐」 (1962-1964)
30. 一党独裁の陰で (1965-1966)
31. 「開発」による平定化
32. 亡命カメルン人の壊滅 (1963-1969)
33. とどめの一発：ンドングモ・ウアンディエ事件 (1970-1971)

エピソード：まだ終わっていない戦争か？

## 2-2 「南北問題」をアフリカ地域研究と重ねて見える新しい「南」の現代史

南北問題をアフリカ地域研究と重ねて読んで見た本書は以下の点でアフリカ現代史に国際的次元を合体する試みとして極めて示唆に富んだ作品である。

まず第1に言えるのは本書のアフリカ現代史の記述スタンスが歴史を勝ち組の秩序観（現行秩序維持容認型）から記述していないことである。むしろ当面の世界において結果として敗者として記述されるが、その後、時の敗者が提起した大義が時を経て実現することもありうるという歴史記述の開放性（openness）が見いだされる。そこでは社会変動の参照軸（reference point）としての「独

立」は「未完の解放（libération, émancipation）プロジェクト」として示唆されている。

第2はこれに関連して、本書の記述対象がアフリカ現代史への挑戦的課題となっていることである。すなわち1960年1月に達成したフランスの植民地から「独立」した国としてのカメルーンについての記述である。1960年は日本でも「アフリカの年」といわれるように、カメルーンも含むフランス領アフリカの国を中心に17の国が一斉に、独立戦争もなくフランス、英国、ベルギーの植民地支配から「独立」したとして注目された年である。フランスでもこのカメルーンの独立は、「一般的にはフランス当局が完全に私利私欲とは関係なく植民地に独立へと導いた平和裡なプロセス」として記述されている<sup>(4)</sup>。しかし本書ではその後開示された資料や証言など豊富な材料で、現実には「戦争」と呼ぶにふさわしいフランス政府による戦略的、組織的暴力であったとしている。本書は、この「独立」というイベントがひたすら隠した真実を、白日の下にさらすことに成功したいわば歴史の真実への貢献である。

1962年に7年間にわたる独立戦争で多くの犠牲を出しながらフランスから独立したアルジェリアも、フランス政府はこの独立運動を戦争とみなさないで、「動乱（événements d'Algérie）」と呼んだ。この悲劇が実は「戦争（Guerre d'Algérie）」と正式に呼ばれるようになったのは独立後37年たった1999年10月の名称変更の法改正によってである<sup>(5)</sup>。

この「戦争」の公的承認は、当然、フランス政府による植民地支配の謝罪、被害者への補償といった正義の回復への道を開く意味でも重要に思われた。

第3に本書の持つ興味深い点は、この戦争の事実解明への接近において、UPCという植民地支配下で戦うナショナリストとその運動の国内外での活動に焦点を当てて、この戦争の持つ「下からのグローバル的性格」が読者に伝わってくることである。この戦争の記述を旧宗主国ないし委任統治国のフランスや英国の資料のみに頼り、いわば「上からの目線のアフリカ現代史」に終わっていない

ことである。実際 UPC の活動範囲は国内での英仏領カメルーンの独立と統一のための草の根政治・文化運動にとどまらなかった。1946 年、国際連合憲章（第 12 章）に基づき、国連により両カメルーンは信託統治領下に置かれ、住民の自治あるいは独立を促進する目的の下で英仏は施政国となる、という他の植民地とやや異なる法的地位を持っていた。UPC はこの国連主導の独立を実現させるために、フランス当局の妨害工作にもかかわらず、1950 年代積極的にニューヨークにおける UPC リーダーによる国連外交（1952 年、1953 年、1954 年）を展開したという記述が各所で見いだされる。また 1955 年のバンドンでのアジア・アフリカ会議を契機に本格的に始まる植民地撤廃の国際連帯運動でも UPC はその拠点となった、カイロ、ニューデリー、ギニアのコナクリ、ガーナのアクラなどでの UPC リーダーの路線をめぐる対立なども含めた活動が、随所記述されている。なかでも、本書で引用箇所が最も多い UPC リーダーの一人で独立後の 1970 年まで戦った前述のウアンディエは、1958 年日本で開催された第 4 回原水禁運動世界大会に参加し、日本の市民にカメルーンの独立運動

の理解を求めている<sup>(6)</sup>。表 1 はこのグローバル性を可視化するためウアンディエを含めた UPC の国際的展開と国際情勢を簡略化して示した年表である。実際、この UPC の興亡をたどる本書はグローバル社会史ともいえ、アフリカ現代史をより豊かにする新鮮な切り口を示唆してくれている。

## むすびにかえて

以上、「南北問題」の歴史を解説するための方法論、そこから見えてくる新たな事実を教えてくれた 2 つの作品を取り上げ、紹介と論評を試みた。したがって、本稿は、経済史からの論考ではなく、あくまでも「南北問題」という世界資本主義のダイナミズムから生まれる地理的不均等発展の構造と展望を探るという関心からの考察である。

そこで当面少なくとも見えてきたのは、長らく自分も含めて学んできた、ヨーロッパの記述が圧倒的に多い高校などでの世界史教育、さらにはそれを支えてきた諸研究は岐路にさしかかっているのではないかという疑問である。今日、アジアなど非ヨーロッパ世界の歴史に関する関心が高まる

表 1 アジア・アフリカ連帯運動の略年表

西暦	カメルーン・UPC	日本・原水禁	アジア・アフリカ アフリカ内	国際秩序
1948	UPC 創設			
1951		サンフランシスコ平和条約・安保条約		
1954	8月. ウアンディエ世界民主青年連盟会議に参加	3月. ビキニ実験 8月. 原水禁署名運動	11月. アルジェリア独立組織FNL発足	
1955	7月. 仏当局 UPC 解散命令	8月. 第 1 回原水禁世界会議	4月. バンドン会議	ワルシャワ条約機構 vs. NATO (1949)
1956	12月. 総選挙 UPC ボイコット・デアラ市の投票率約 2 割	8月. 第 2 回原水禁世界大会 12月. 日本国連加盟	スエズ運河国有化	ソ連平和共存路線
1957		8月. 第 3 回原水禁世界大会	3月. ガーナ独立 第一回 AA 諸国民会 (カイロ)	2月. 第 12 回国連総会カメルーン独立決議可決
1958	8月. UPC エルネス・ウアンディエ日本・ヒロシマ参加 9月. ウム・ニオベ仏軍により国内殺害	8月. 第 4 回原水禁世界大会 FLN 東京極東代表事務所	4月. 第一回アフリカ独立国会議 10月. ギニア独立 12月. 第一回アフリカ人民会議 (アクラ)	
1959				キューバ革命 中ソ対立
1960	1月. カメルーン独立 11月. ムニエ議長毒殺 (ジュネーヴ)		第 2 回 AA 諸国民会議 (コナクリ)	

出典：評者作成

中で、その時代区分や、ともするとナショナルな分析単位を重視してしまい、ローカルとグローバルな現象を背景にしてしまってきた歴史記述形式を再検討すべき時代に入ったのではないかという問題提起である。これはアジアの興隆といった覇権の歴史観の正当化でなく、何よりもまずグローバル化した資本主義の構造とそのダイナミズムと限界、そしてより人間的で持続可能な環境に立ったあらたな世界経済政治秩序展望を探る知的作業の必要性を意味する。

なお今回の論考で取り上げられなかった A・G フランク<sup>(7)</sup> やケネス・ポメランツ<sup>(8)</sup> などの歴史研究書も、今後「南北問題」の一層の論考を深める意味で見逃せないと思うので取り上げてみたい。また世界史における「産業革命」の位置づけも、そもそも「革命」と言われる程の急変化があったのかという疑問や、英国にとって産業エネルギーとしての石炭資源のアクセスが容易だったから可能になったという説<sup>(9)</sup> も「南北問題」の源流を探る際に重要と思われるが、今後の宿題としたい。

もう一つはベッカーが強調する如く、歴史的に存在してきた資本主義は標準経済学の無色透明な価格と量が市場で決定されるといった世界ではなく、実は暴力に満ち満ちていたという事実を正面からさぐる、歴史研究の視点の重要性である。とりわけ本稿で取り上げたアフリカ現代史研究のように、「南」の形成過程で生まれた数々の暴力の真実の研究は、グローバル資本主義の展望を探る意味で避けられない課題に思える。

## <謝辞>

なお本稿の執筆にあたり、複数のそれぞれの分野の同僚研究者にアドヴァイスやコメントをいただいた。この場で感謝したい。

## 注

- (1) [https://twitter.com/tahimik\\_japan](https://twitter.com/tahimik_japan) (2019年6月10日閲覧)
- (2) 本稿での英文「cotton」は「綿」と訳したが、摘み

取られてから加工場に運ぶまでの未加工状態の綿は「原綿」と呼んだり、摘み取った状態のままのものを「棉」、種子を取り除いた後の状態のものを「綿」と区別することもある。しかし本稿ではコットン畑で育てている間の「綿」は「綿花」としてその栽培・育生を「綿花栽培」という用語にした。

- (3) 評者は、今は亡き研究同僚筆宝康之氏とミシェル・ポー(著)「資本主義の世界史 [1500-2010] (増補新版)」, 藤原書店, 2015年に解説をつけて共訳したが、冷戦期以降の世界資本主義の記述はヨーロッパ中心史観に対する懐疑感がにじみ出ている。
- (4) Thomas Deltombe, Manuel Domergue, Jacob Tatsitsa, *La guerre du Cameroun — L'invention de la Françafrique, La Découverte*, 2016, 226pp. なお本書に関して「ポスト独立期のアフリカを振り返る文献紹介」として、アフリカ協会季刊誌『アフリカ』, 2019年春号, vol.59, で短く紹介してある。
- (5) «Loi relative à la substitution, à l'expression "aux opérations effectuées en Afrique du Nord", de l'expression "à la guerre d'Algérie ou aux combats en Tunisie et au Maroc», *Guerre d'Algérie et combats en Tunisie et au Maroc*, 1999
- (6) 評者は、このテーマに関してタンザニアのダル・エス・サラム大学で2018年9月20日、アジア・アフリカ国際シンポジウム「Africa-Asia "A New Axis of Knowledge 2"」において「Peace Movement in Japan and Decolonization in Africa - How Japan understood Africa in the 1950s」を、そして日本アフリカ学会年次学術大会(京都精華大学)にて2019年5月19日「日本とアフリカの脱植民地化—1950~60年代の来日アフリカ人独立運動家の軌跡」を報告した。1958年に来日したカメルーンリーダー Ernest Ouandier 氏については、滞日中同氏に同行した谷口侑、「アフリカ・68年の死角—カメルーンのもう一人のエルネスト」、雑誌「環」33号, 140-150ページ, 藤原書店, 2008年を参照。
- (7) 例えば, A・G フランク, 山下範久訳, 『リオリエント』(藤原書店), 1998年
- (8) 例えば, K・ポメランツ, 川北稔監訳, 『大分岐—中国, ヨーロッパ, そして近代世界経済の形成』, 名古屋大学出版会, 2015年。
- (9) 水島 司・島田 竜登, 『グローバル経済史』(放送大学教材, 2018年) 第12章「エネルギー」を参照。